

では、電気炉を稼働させるための変電所や送電網なども被害を受けていた。それだけに年内の操業開始は難しいとの見方が広まる中、「地元石巻市の復興の一翼を担いたい」との一念で、同社は速やかな復旧を固く誓っていた。

製鉄プラント部門は、既設の電気炉および付帯設備の納入メーカーとして、被害状況の調査のためのエンジニアたちを派遣した。多くの設備が海水に水没して傾いていたが、同社と一丸となって復旧案を立案。難航を極める工事を並行して進めていく。そして多くの関係者が見守る中、二月三日にホットラン（稼働）を達成し、翌日から通常操業を再開した。

同工場の操業再開は、石巻の町に活気を与えるだけには留まらない。東北地区の鉄スクラップ受け皿として、リサイクルの循環をも復活させることになった。



9ヶ月ぶりに操業再開

### 被災地ボランティア

七月・八月の計三回、石巻市内において震災ボランティアを実施しました。参加者は家族やグループ会社社員を含めた七〇名。受け入れやコーディネートはNPO法人オンザロードにお願いしました。



業……水分補給やベース配分を管理していただいたおかげで、ケガや体調不良などを一件も出さずに全日程を終えました。「継続的な復興支援が不可欠」というのが、被災地を五感で感じた参加者全員に共通の思いです。

## 2011 10・26

# JX仙台 製油所 三の橋 復旧工事

ここ JX日鉱日石エネルギー（株）の仙台製油所では、津波により施設が破損し、火災が発生。道路が寸断されて消防車が近寄

れず、鎮火と避難解除にこぎ着けたのは三月一五日の午後のことだった。

同社では復旧工事に際して、災害に強いエネルギー供給基地の再構築を目指した。陸上出荷設備の移設や、電気系統の見直しなどの津波対策が講じられている。さらには、製油所周辺の道路事情にも着目した。早期に西地区からのタンクローリー入出構を可能とするため、大型車両が通行可能な東西地区の連絡橋を新設。災害時にも、消防車などが

効率的に移動できる。

この橋を担当したのが、日鉄トビープリッジ株式会社。主桁と床鋼板を一体化した組立式橋梁の「パネルブリッジ」を採用。架設作業の省力化、桁下足場の省略による短工期施工が可能で、本工事では着工から一〇五日目の一〇月二六日、工場製作と現地架設を完了した。



## 2011 11・18 東京電力(株) 広野火力発電所 燃料配管 復旧工事

「よく来てくれました」という発電所員の言葉が、すべてを物語っていた。燃料配管が津波で破損した東京電力広野火力発電所は、東日本大震災の影響を受けた福島第一原発から約二〇キロに立地する。まずは三月末に社員二人が、防護服等を装備して現地入り。現場の状況について調査とヒアリングを実施

した。放射能の影響が懸念される中で現場作業と作業者の安全管理をいかに徹底していくか——という、当社にとって初の体制作りを急ピッチで進めた。厳しい納期に対し、綿密な施工計画のもと、配管製作・輸送を工夫し現地の作業を大幅に削減した。加えて、鋼材は新日本製鐵(株)の協力で最短納期を実現。配管プレファブ製作は日鉄トビープリッジ(株)、詳細設計は日鉄パイプライン(株)という連携により、短工期での復旧を達成した。一月一八日のことである。



「使命感が強く感じられた」と、担当エンジニアは言う。「そんな関係者たちのためにも」という思いが、たび重なる余震や台風などの困難にも勝ったのである。

とわかったときは、涙がちよちよぎれましたね」と青木社長は振り返る。

震災から約一か月の四月一日、一部の地区で都市ガス供給が再開した。社内外の多くの人に助けられ、本田と安部らは社長との約束を、社長は市民との約束を果たしたのだ。

五月一七日には、津波による流出を免れた契約世帯・約一万戸への都市ガス供給が可能になった。各世帯の点検などのため、全国から駆け付けた日本ガス協会の応援部隊は延べ一万三千人におよぶ。

製造責任者の阿部部長と大井課長は、なんども繰り返し言った。「全国からたくさんの方が応援に駆け付けてくれたことに、心から感謝しています」

本復旧工事は、約一年にわたって続き、この四月に無事終了した。

石巻ガスは、市民のためにいち早く、ライフラインの回復に努めた。これからは、多額の損害を負った自らの経営を回復させなければならない。その戦いは始まったばかりである。



石巻ガス社長/青木八州氏

本田は肩を落とした。仮設備は倒壊したかもしれない。その晩から明け方にかけてのことを青木社長は忘れない。「あの余震の夜は、ショックだね。もうダメだと思って、開き直ってお酒を飲んで寝たんですけど朝五時頃、気になって目が覚めて、仮設プラントに駆け付けた。本田さんたちも来てましたよ」

仮設置だからと妥協して、土台部分を鉄板敷きにしていたら、確実にアウトだったろう。だが、本田と付き合っている建設会社が、この現場では困難なコンクリートの土台を花巻で製作してくれていた。それを設置したおかげで、設備は大きな余震に耐えたのである。「設備が無事だ

青木社長は三月三〇日、石巻市役所での記者会見で宣言した。「四月一〇日から段階的に、ガスの供給を再開する」

本田ら現場スタッフも、大詰め調整に入っていた。だが、耐圧試験を翌日に控えた四月七日の夜中、大きな余震が襲ってきた。停電の真っ暗闇に包まれたホテルに、津波警報のサイレンが鳴り響く。



懸命の復旧作業が続く現場

石巻ガス製造責任者の阿部部長らが迎えた。

「よく来てくれましたよ」

あとは言葉にならない。大の男同士で泣きながら、がちりと肩を抱き合っていた。

本田と安部の二人を中心に、復旧計画が進められた。仮設備として使える気化器とローリーが調達できることは確認できた。配管はグループ会社の日鉄パイプライン(株)が揃える算段もできている。低温部分に用いるバルブは半年近くの納期を要するため、既存設備から使えそうな箇所を切断して集め

- 凡例
- 海 海洋事業部
  - 鉄 製鉄プラント事業部
  - 環 環境ソリューション事業部
  - エ エネルギー事業部
  - 建 建築・鋼構造事業部
  - 日 日鉄パイプライン(NSPL)
  - 7 日鉄トビープリッジ(NTB)